

たんぽぽの家

播磨靖夫 | はりま やすお

奈良県奈良市



「活動を始めたきっかけ」

播磨…50年ほど前、僕が高松で新聞記者をしていたときに、知的障がい者を対象にした絵画教室の取材に行きました。そこで彼らの作品を見て、岡本太郎の『今日の芸術』という本を学生時代に読んだときの衝撃が蘇りました。新聞記者独特の直感で、これこそが今日の芸術だと思ったんです。

その後転動になり、異動先の奈良で障がい者問題のキャンペーンを始めました。障がいのある人に取材をしていて気づいたんです。が、受け入れてもらえなかった経験が少なからず、みんな自己主張がうまくできないんです。もっと自由に表現してもらおうと、障がいのある人に詩を書いてもらいました。その詩にメロディをつけて若者が歌ってくれたんです。それがきっかけで「わたぼうし音楽祭」が始まりました。そうやって彼らの表現が社会に出ていくのを目の当たりにして、文化の力、芸術の力を実感しました。それが第一歩ですね。

「社会への広がり」

播磨…我々は行政の力をほとんど借りずに、民間の力でお集めもブランディングもやっていきました。トヨタ自動車や明治安田生命、近畿ろうきんなどの企業と組んで実施した事業は、メセナ協議会から文化庁長官賞などを受賞し、関わった企業のブランド力も上がっていききました。

活動を続けていて感じるのは、生活と芸術がもっと近づかないとだめだということ。つ

くる人、観る人、演じる人というふうに分けたらいかん。そう思って始めたのが「へびと・アート・まち」です。その一環である「プライベート美術館」では、まちのお店の人が障がい者の作品から好きなものを選んで持ち帰り、自分のお店に飾るんです。お願いして飾ってもらおうではなくて、自分の感性で選んで持ち帰る。これは市民教育なんです。だから、誰かが評価したということではなく、自分の感性で選ぶということが大きい意味を持つんです。

また、これからアートを始めようとか、何かやってみたいと思っている人達が情報交換し、ノウハウをシェアする場として、奈良で「福祉をかえる『アート化』セミナー」を開催してきました。そこでも学んだのが「工房まる」や「やまなみ工房」でした。

「現在の貧困との戦い」

播磨…こうした活動を全国に広めるために開催された「トヨタ・エイブルアート・フォーラム」に、最初に関心を持ったのはNPOでした。福祉関係者は「障がい者にアートなんてできるはずがない」と決め込んで、関心が薄かった。みんな障がい者と健常者をわけて考えたが、みんなが、それは近代の発想です。近代以前に



は障がい者という概念はなかったんです。
山出：30年くらい前には障がいと言われて
いなかったものが、今は障がいとされたり、ど
んどん細分化が進んでいるようにも思います。
播磨：みんなそういうことを疑いもしいない。
それは貧困になっていく道筋を歩んでいると
いうことです。貧困には、経済格差だけで
なく社会的排除という社会的貧困や文化的貧
困もある。商業主義の文化が支配的で、文化
格差が生きている。もう一つ、精神的貧困
もある。これは痛みや悲しみを慈しむ文化が
なくなってしまうというところ。

こういう現代の貧困のほとんどに障がいの
ある人が当てはまってしまっている。その現状と戦
わないとだめだというのが僕の根底にある考
え方です。

山出：障がい者は社会に適合できない、とい
う見方もありますが、先ほど見学させていた
だいた制作の様子は、みんなすごく幸せそう
で、豊かな場だと感じました。

播磨：ありがとうございます。個人差があり

「幸福とは何か」

ですが、僕は幸福とは「生き方の幅」だと考
えています。ここにいる障がいのある人達は、
自分で自分のやりたいことを選べる自由があ
る。そういう生き方の幅が、幸福なのではな
いかと考えています。

山出：播磨さんのご活動は、障がい者だけに
関わるものではなく、言葉を置き換えれば社
会の全てに関係していくもののように感じま
す。

播磨：障がい者だけが恵まれたらいいという
ものではない。目先の課題だけではなく、そ
の先にある普遍的なものに眼差しを向けるこ
とで、活動の幅が広がっていくんです。

「新しい芸術運動」

播磨：バブルが弾けたあと「社会貢献を見直
したい」と相談に来る企業の方が増えました。
そこで、東京都美術館でのエイブル・アートの
展覧会に声をかけたら錚々たる企業が参加
してくれました。その頃エイブル・アートの
本を出したこともあって企業の関心が高まり、
大きく広まってきました。

僕が「エイブル・アート・ムーブメント」を
提唱したのは1995年。阪神淡路大震災や
オウム都市テロがあった年でした。世界史
的に見ても、価値観が揺らぐほど大きな出来



事が起き、心が不安になる時代には芸術運動
が起きている。そんな時代だったからこそ、
障がいのある人達のアートの価値を見直し
「アートの社会化、社会のアート化」を目指す
新しい芸術運動を起そうと考えたんです。

山出：以前は暴れたりすることでしたか自分の
気持ちを表現できなかった人達が、絵やア
ートで表現し始める、そのきっかけには何があ
るんでしょうか？

播磨：いくつかパターンがありますが、自己
表出によって変わっていくことは多いです。ね。
最初は殴り描きだったりして形にならないん

「社会とどう繋げていくか」



だけど、表現しているうちに自分でも驚くような才能が現れ始める。そうすると見てもらいたいという欲求が生まれ、コミュニケーションが始まります。ただ絵を描くのではなくて、想いを伝える方法を探るようになっていく。

自己表出のときにワンパターンなほめ方を



していると、その人はずっと同じことを続けます。だから、こちらも毎回ちよつとずつ反応を変えるんです。そうすると、次はまた違うものを描いてくる。ただほめるのではなくて、イメージを持ってレスポンスをするということが重要です。そうすると、どんどん変わっていく。自己表出って面白いですよ。こ

れは障がい者だけじゃなくて、子どもだって一緒だと思う。

山出…全ての施設がアート活動を導入するのは難しいですよ。一人ひとりちゃんと向き合い、その人にとっての自由の形や表現を”アート“という形で認めたとしても、施設がどう扱ったらいのかわからないというのが現状なのではないでしょうか。

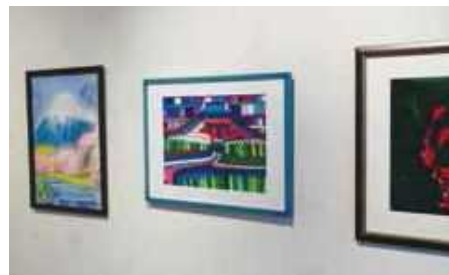
播磨…福祉施設はよくグループ展をやるけれど、たんぼぼの家では画廊での個展や二人展をするようにしています。グループ展では個が埋没してしまう。ここでは個を尊重し、施設の外で展覧会をすることによって他者を意識することをすごく大事にしています。

山出…たとえば農業をやっている福祉施設は消費者という対象があるので他者を意識しやすい。それに対し、アートの場合は鑑賞者はいるけれども全ての作品が売れるわけではない。ほめられることはある種の自己実現だと思いますが、それが社会にどういうふうにつながっていくのが大事だと思います。若いアーティストは、みんな自分の作品を社会に繋げるために悩んで苦しんでいる。でも、ここに通う人たちはみんな幸せそうですね。この差って何なんですか？

播磨…彼らは自分の表現が社会から受け止められている、そしてそれは見る人に感動を贈っ



<アートセンター HANA> (e) 内のギャラリー



ているという贈与の感覚を持っているんじゃないかな。自分の表現に誇りを持っている。

山出：経済的な意味だけではない社会との繋がりで方でしょうか。

播磨：そう。それを感じさせるためには我々の仕掛けの問題もある。彼らの表現に出会った人が、芸術の至福を感じるということが大事です。たとえば作品を展示するときは、広い空間に1個だけ置く。たくさん並べてしまうと、表現を相殺してしまう。スペースを贅沢に使うことで、見る人の感動を増幅させることができるんです。

ある作品との出会いによって鑑賞者に芸術の至福をもたらすには、華麗なる独断と、爽やかな偏見で大胆に仕掛けていくことが必要なんです。

「アートの社会化と社会のアート化」

山出：僕は本来アートと生活は一体だと思っています。でも近代以降、アートの価値が価格によって計られるようになった。それを否定はしないけれども、マーケット中心のあり方をどう超えるかが大きな鍵になってくる。その点を播磨さんは、どのようにお考えですか？

播磨：貨幣が支配する世の中では、一部のコ



<プライベート美術館>(6)の展示風景



レクターや愛好者が求めるアート以外は実態のないものと思われています。しかし、成熟社会が到来すると、小さきものに宿る光にどう向き合うかが主題となってきます。アートの社会化を目指すのはそのための第一歩です。美術館やギャラリーのような、いわゆるホワイトキューブの中だけでアートを語るのではなく、もっと外に目を向けていっていいんじゃないか。アートには古い体制を破り、社会の問題をクリエイティブに解決していく力がある。もっと柔軟にアートの社会化を進めるべきだ。

山出：播磨さんがおっしゃる「アート」とは、ジャンルや形態ではないんですね。

播磨：そうです。アートは、さまざまな技術を組み替えるメタ技術なんです。アートによっているんなものを組み替え、新たなデザインを生み出す可能性もあるはず。それが今進んでいる「Good Job! プロジェクト」⁽⁹⁾です。もっと多方面にアートの効能が作用し可能性を発揮していくこと、つまり「社会のアート化」も同時に進めるべきだと考えています。

知性や感性や魂の深さにおいて成長する、文明の転換期がこれから訪れようとしています。アートも宗教も哲学も、みんな繋がっています。もっと広い視野でデザインしていかねばならない。想像力のパースペクティ

ブが求められる時代になりました。

オーストリアで社会問題をアートに取り込んで活動していた人が、後に政治家になったという話を聞きました。つまり、アートというのは政治の技術なんです。彼は作品を残すのではなく、政治家になり社会をデザインすることにしたんですね。アートというのは行為やプロセスも含むと思っています。アーティストがもっと政治やソーシャルデザインに参加すべきだと思う。すでにコミュニティデザインに取り組む若いアーティストも増えていますよね。彼らの発想は実に面白い。多様なテーマを持ちながら、原点を見据えたデザインができるのはアートだけじゃないかな。



<Good Job! 展>(10)の様子



・宗教、芸術、哲学・

播磨：僕は今、霊性（スピリチュアリティ）の研究をしています。宗教、芸術、哲学が一体になって意識することがアートにとっては大事だと思っています。

山出：アポリジニの洞窟画のように、この世とあの世だとか、どこか違うところと自身を接続するためのイニシエーション（手続き・儀式）としてアートは生まれたと言われていますが、そのことと繋がりますね。

播磨：うん。知的障がいのある人が、オーストラリアのブリスベンで1ヶ月間滞在し、制作活動を行ったんですが、そのときにアポリジニが宇宙の物語を作品に込めていることを知り、作品が変わっていききました。ただ自分の好きなものを描いたらいいという方向性だったのが、自分の内にあるもの、大事なものをどう表現するかという考え方を学んだようです。

・受け止める側の課題と今後の展望・

山出：今、アート界全体でも障がい者アートへの関心が高まっていますが、「障がい者」というフィルターにかけられてしまうことには違和感を覚えます。

※本文中の注釈番号は年表の項目と対応しています。

年号	活動内容
1973	●「奈良たんぼの会」発足
1975	●「わたぼうしコンサート」初開催
1976	●「全国わたぼうし音楽祭」初開催 ●「財団法人たんぼの家」が設立認可
1980	●障がいのある人達が地域生活での自立を目指した〈たんぼの家〉完成 ^{①②}
1981	●「ことばを得ることによって想像力がはばき、その想像力が未来をつくる。」をテーマに「わたぼうし文学賞」を創設
1987	●「社会福祉法人わたぼうしの会」が設立認可
1988	●ホールやコミュニティスペースを備えた劇的空間施設〈わたぼうしの家〉オープン ^③ ●〈たんぼの家〉〈わたぼうしの家〉の2つの建物を拠点として、「社会就労センターたんぼの家」（身体障害者通所授産施設）スタート ●「たんぼ憲法」を制定
1991	●「アジア太平洋わたぼうし音楽祭」スタート
1995	●障がいのある人のアートを新しい視座で捉え直す市民芸術運動「エイブル・アート・ムーブメント」始動 ^④ ●阪神淡路大震災被災障害者救援プロジェクト「HELP NETWORK」を展開

これまでの歩み（1973 → 2016）

*…NPO法人 エイブル・アート・ジャパン によるプロジェクト



現在のくアートセンターHANA>(8)

播磨：彼らの表現を「アールブリュット」や「障がい者アート」みたいな言葉で一括りにするのは惜しいと思います。障がいのある人達のアートにとって不幸なのは、それを受け止めるだけの知性や感性が社会に育っていないということなんです。それって、今の社会が直面している問題そのものですよ。受け止める側の受信力があれば、どのようなものにも美を見出すことができる。日本人は、不完全なものに美を見出したり面白がったりする感性を持っていますからね。

山出：それが豊かさに通じるんですよ。

播磨：福祉業界の中では徹夜してでも、ものづくりで所得を上げるという声がある。そこで我々は、アートを収入に繋げる方法を考えている。

アート活動は精神労働です。それにデザインの才知を加えることによって、付加価値の高いプロジェクトが作られる。(Good Job! プロジェクト)⁽¹⁰⁾で提唱しているのは、そういう新しい可能性の再分配なんです。今年の夏には、そのシンボルとなる「Good Job! センター」⁽¹¹⁾が完成します。そこで生まれるかけがえのないデザインやプロダクトに新たな可能性を感じてもらえれば、福祉は変わる。これが我々の次のステップなんです。

1996	●ものづくりにこだわる全国の福祉施設や作業所の『すぐれもの』を集めてネットワークキングをはかる「まほろば・奈市・奈座」を開始(〜2005) *「トヨタ・エイブルアート・フォーラム」の全国展開がスタート ⁽⁹⁾
1997	●東京都美術館にて、エイブル・アート展「魂の対話」開催
2000	●「芸術とヘルスケア協会」を設立(2005年「アートミーツケア学会」に改組) ●「ひと・アート・まち」とその一環として「プライベート美術館」スタート (主催：近畿労働金庫) ⁽⁶⁾
2002	●「福祉をかえる『アート化』セミナー」を開催 ⁽⁷⁾
2004	●23年前に建てられた「たんぼの家」が、地域に開かれた交流の拠点 (アートセンターHANA)としてリニューアルオープン ⁽⁸⁾ *障がいのある人の舞台表現の可能性を探る「エイブルアート・オンステージ」が始動(明治安田生命社会貢献プログラム)
2006	●アートセンターHANA所属のアーティストがオーストラリアでのアートフェスティバル・イン・レジデンスに参加 ⁽⁹⁾
2007	●障がいのある人のアートを社会に発信し、アーティストの仕事として還元する「エイブルアート・カンパニー」設立
2011	●東日本大震災復興支援プログラム「笑ってプロジェクト」 「タイヨウプロジェクト」をスタート ●奈良県障害者芸術祭「HAPPY SPOT NARA」スタート(主催：奈良県)
2012	●「Good Job! プロジェクト」スタート ⁽¹⁰⁾
2016	●「Good Job! センター」オープン(予定) ⁽¹¹⁾

音遊びの会

沼田里衣 | ぬまたりい

兵庫県神戸市



「即興音楽との出会い」

沼田：音楽のコミュニケーションの側面に興味を持ち、その場で立ち上がっていくような音楽を実現したいと思っていました。そんなときに出会ったのが創造的音楽療法でした。2005年、神戸大学の院生達と音楽のいろんな実験をして遊んでいたのが音遊びの会の始まりです。その頃「エイブル・アート・ジャパン」のプロジェクトの実行委員をしていた野村誠さんに応募を勧められて。そうやって、みんなと一緒にスタートさせました。音遊びの会では、即興やクリエイティブなことにこだわっています。音楽の形式にとらわれ過ぎてしまうと、自分の中から湧き出るような感覚はなくなってしまう。出発点は音

に意味を込めてやりとりをするコミュニケーションの要素。障がいのある人達はコミュニケーションがうまくできないと言われていたけれど、彼らなりの方法があると思うんです。即興の手腕があるミュージシャンはそこが理解できる。そこから音楽が立ち上がるということに興味がありました。

「多方面の人が関わる」

山出：「音の城、音の海」に多数のミュージシャンに関わってもらったのはなぜですか？沼田：プロのミュージシャンはすごいと思う一方、形骸化しているところもあって、障がい者のほうがいきいきと音楽をやっていると思うこともありました。そこで両者が出会うことによって、お互いにとって刺激になれば、と思ったのです。障がいを持った人達は、パフォーマンスが上手になりましたし、アーティストも変わりました。障がいのある人に対する目線が変わったという方もいます。一緒に音楽作りをしていくことで、今までにない繋がりも生まれました。即興音楽について保護者の理解を得るのは大変でしたが、ミュージシャンが新たな視点から障がいのある人の音楽的価値を見出して、それを保護者に伝えていたのが自信になっていったと思います。保

護者は最初は見学していましたが、音楽家の大友良英さんが「一緒にやろうよ」と言ってくれてから一緒に音楽を作るようになりました。子ども達だけでなく、保護者が新しいパフォーマンスを見せてくれることがアーティストが参加する一つの要因になりました。

山出：お互いにブレイクスルーになることはありましたか？

沼田：推測ですけど、大友さんは障がい児教育の現場に実際に行ってみることを通して、プロの勘で「いける」と思ったようですよ。公演で子ども達とトリオ編成で音楽を作る「大友の部屋」というのを提案されたときは、すごいと思いました。ブレイクスルーというよりは、いろんな人達が複層的に関わっている感じです。音楽家の林加奈さんは、保護者やミュージシャンの家に泊まり込んで共同作曲をしながら、関係性をクリエイティブに紡いでくれた。大友さんの提案で、保護者の持ち寄りで飲食をともにする会やおやつ会も開いたりしながら、交流しやすい環境を作っていました。仲良くなるというという意味では、ツアーも大きいですね。ツアーで保護者とアーティストが夜遅くまで話し合ったり、移動中もわいわいやっています。

山出：みんなが参加できるように進めていく



映画「音の城♪音の海 -SOUND to MUSIC-」より

ための工夫や苦勞は？

沼田：障がい者にもミュージシャンにも本気になってもらわないといけない。ミュージシャンも福祉の場とライブハウスでは音の出し方が違うし、障がいのある子にも、てらいがある場合もあります。いろんなことを試しながらやっているの、関わったミュージシャンは許容度が幅広くならざるをえない。新しい可能性に気がついて、価値観が広がる方がいいな、と思います。

「音遊びの会の定義とは」

山出：沼田さんにとって望ましい状況はなんですか。

沼田：みんなにコンセプトをある程度わかってもらいたい。障がい者のためなんだけど障がい者中心の会ではない、ということを理解してもらおうのはなかなか難しい。保護者のなかには居場所や教育の場として参加している人も多いので、音楽の価値観をわかち合えているかという、なかなか難しいですね。価値観はバラバラなまま、それぞれがメリットを感じられるよう共存する方法を保っています。

山出：音遊びの会をどう説明していますか？

沼田：障がい者中心だと言ってしまったら

障がい者アートになってしまったり、音楽中心だと言ってしまったりやらせになってしまったり。公演の取材を受けるときには「音楽バンド」、学会で発表するときは「コミュニティ音楽療法」というように、説明の仕方はその都度違う。

今、音遊びの会を説明するのだったら「障がいのある人を含むアーティスト大集団」かな。

「観客の反応」

山出：公演にいらしたお客さんの反応はどんな感じですか。

沼田：観客のアンケートを見ると、いろんな見方がある。即興演奏の面白さを再確認してくれたり、障がい者との関係性のあり方を評価してくれた。印象深かったのは「目に見えないものが音に現れている」という感想ですね。いろんな事情や背景が音に含まれていることを感じてくれたりとか。

指示行動の練習を自閉症療育として実施する人からは、自由な方法に「ありえない」と言われることもあります。でもうちに来てくれる保護者は、子どもがいきいきとして本当に楽しんでいるのが感じられるから参加している。自閉症の人は決められたことがないと不安がると言われているけど、実際そうでもないなっていう感触はあります。

「大切にしていること」

山出：音遊びの会をするうえで、最も大切にしていることは何ですか。

沼田：音が死なないように、いきいきとした音を作りたい。音楽の作り方の可能性はいくらでもあるから、新鮮さを保つためにいろいろ試していきたいと思っています。

「今後の展望」

山出：これから音遊びの会というのは、何を目指していけますか？

沼田：こういう音楽のあり方を社会と共有できたらいいなと思います。最近では教育関係者からの関心も高まっています。そういう方面からも新しいものに繋がっていくといいなと思います。去年、規約を作りましたが、音遊びの会とは何なのかという議論はしていない。説明しづらい、そういう得体の知れないものが音遊びの会なのかも、とも思っています。

みやざき◎まあるい劇場

永山智行 | ながやま ともゆき

宮崎県都城市



「まあるい劇場に至った経緯」

永山…1990年4月に宮崎県都城市で、高校時代の演劇部の関係者に声をかけて劇団こふく劇場を立ち上げたのが始まりです。作風はどんどん変わってきていますが、いわゆる現代劇をやっています。

山出…まあるい劇場という活動が始まったのは、そもそもどういう経緯で？

永山…2001年に宮崎の「アートステーションどんこや」という作業所が主催した平田オリザさんのワークショップの見学に行ったん

です。そのワークショップには、車椅子の方も参加されていました。それがきっかけで、こふく劇場も年に1、2回くらいどんこやでワークショップをするようになりました。

2006年度、「エイブルアート・オンステージ」という障がい者『も』参加して舞台芸術の作品を作る企画に参加することになった、そのときにはじめてまあるい劇場としての作品「隣の町」を作りました。脳性小児麻痺や筋ジストロフィー、知的障がいや精神障がいなど、いろんなメンバがいたので、どう作っていくか悩みながらワークショップをしました。ある日、言葉を使わずに落ち込んでいる友達を慰めるというシチュエーションのエチュードをやったんですけど、筋ジストロフィーの平野さんは電動椅子でスーツと友達役の女優のところに来て、ギリギリまで来て引き返す。もう一回近づいて、また引き返して、最後によく彼女のところへ行って、筋ジストロフィーのあまり手が動かないんだけど一生懸命手を伸ばして、女優の手の上に乗って手を置いた。それだけだったのでパツと手を置いた。それだけだったのではないなと思っただけです。

山出…それは演出だったんですか？

永山…いえ、何もしていません。平野さんがここに生きていて、誰かとコンタクトをと

ろうとしているということ自体がすごく感動的で、演出は必要ないと思った。そういうところがワークショップを通じてたくさん起きたので、普段通りにやろうと決めました。演じるにあたって、障がいそのものがテーマになっってしまったように、障がい者に障がいの役をさせないことにしたんです。演劇作品として評価されるものを上演したいから、普段通り稽古をして、いい作品を作るということに徹しました。

「役者に圧倒的に勝る存在感」

山出…稽古の中で、こちらの物差しだけではできないことがありますよね。

永山…むしろ役者の方が困ったんです。脳性小児麻痺の和田ちゃんと俳優が会話をしているシーンがあると、和田くんが存在感が圧倒的なんです。和田くんが喋りだすとお客さんがきちんと聞こうと思っただけで、彼の一挙手一投足は目を引く。コップに手を伸ばすだけの動作でも、すごく美しい。彼らは自らその身体になったわけではなくて、いろんな事情があって、その身体を背負わされたわけですよ。その身体を背負って生きている姿が見えやすい。私達は彼の姿を見て、生きるというこの大変さを実感する。私達も、生きる

時代や生まれる場所を選べないし、不意に降ってくる状況を受け入れなければならぬということもある。障がいを持っていない我々も不条理を抱えています、それは見えにくい。

喉が渴いたからコップを手を取るとか、何かのためにする行為では、どうしてもその目的の方に意識が向けられてしまう。手を伸ばすことの美しさを純粹に感じることができないのは、その身体を背負っているという不条理があるからだと思います。それを「障がい」という言うのは引っかけますね。だって、舞台上立つにはプラスなんです。舞台に関しても、例えば、変な言い方ですが我々の方が障がいがある、遅れを取っている存在なんです。同じ演目をこふく劇場が上演するときに「やっぱりまああるい劇場のほうが面白かったね」と言わないよう、今ここにいることの不条理や不思議を、どう身体で表現するかということが一番のテーマです。まああるい劇場とこふく劇場を行ったり来たりの中で私達は常に自分達の表現を確かめています。

「障がい」の境目

山出「障がい者が出る演劇」という先入観を持たれてしまうことをどうやって乗り越えられていますか？

永山「やはり障がい者が障がい者の役をやらないということですね。最初は違和感があるかもしれないけれど、本質的な内容は全く変わりません。だから、普段通り会話劇を丁寧に組み上げてお届けするだけかな。まああるい劇場だからこういう作品にしようということには特ありません。身体的にはいろんな違いはあると思いますけれど、その違いが大きいというだけなんです。私達にとっては障がい者というよりも、個性を持った一個人でしかありません。遠回りも近道もなく、その一人ひとりと丁寧に作品を作るということだけですね。

山出「まああるい劇場とこふく劇場がいつか一つに集約されるイメージはお持ちですか？」
永山「まああるい劇場は、こふく劇場のプロデュース公演という位置づけでやっています。根本的な話をする、障がいを持ってほしい俳優というわけではない。でも本当にいい俳優に出会えたら、いつか車椅子や知的障がいを持った俳優がうちの劇団員に加わる可能性もあるかもしれません。

私達の日常の風景の中に障がい者がいるのは当たり前なことなので、車椅子に乗った俳優がいるのも当たり前な気がします。ツアーに行く、「私もやってみたいんですけど、どこでできますか？」って、車椅子のお客さ

んに声をかけられることもあります。でも、こういう活動をしているところってないんですよ。うちも大きな目的があって始めたわけではなく、いろんな出会いから生まれた偶然の形としてこういう活動をしています。でも、始めてみればたくさんさんの発見や、演劇を作るうえで大きな刺激みたいなものをもっている、みんなやればいいのにと思っています。

うちも障がい者の演劇をしているつもりはなくて、障がい者『も』いるということなんです。うちは作品を作るというモチベーションが続けていく力になっています。障がいということが前景に出てしまったり、それが物語になってしまったりすると続かない気がします。でも、普段通りにいかないこともある。普段だったら、共演者に対して食事や入浴やトイレの介助は必要ありませんよね。でも、そういうことをしているとだんだん視点が変わってきました。乗り物に乗ることや施設がバリアフリーかどうかということに、切実な問題として直面する。そういう視点の変化って、立ち止まる力なのかなと思います。

いつも私達は「今」という時間になくて、ちょっと先のために何かをしている。でも、立ち止まらないとわからないこともあるし、立ち止まったから手に入れられた視点もある

ります。それは彼らに教えてもらいました。経済効率の中に身を置いているとなかなか難しいんですけど、障がい者や子どもやお年寄りには立ち止まるのが得意な人が多いです。子どもなんて「今」の達人ですよ。劇場や美術館は立ち止まるための場所だと思います。劇場に足を運んでお芝居を観たところでも明日の仕事に繋がるわけでもないし、絵を見て経済的な効率が上がることもない。立ち止まって、自分の人生を振り返る場所ですよ。まああるい劇場をやりながら、そんなことに気づかせてもらいました。

「よくわからないけど」と言わせたい

山出「我々はまだ見ぬ価値や不条理だとか、わからないということを大切に考えていますが、それが今どんどんなくなっていると思うんですよね。

永山「昔はわからないことのほうが多かったけれど、今はなんでも検索できてしまうので、わからないということに対しての怖さが大きくなっているような気はするんです。

山出「たとえば、作品に対して「なんかよくわかんなかったね」と言われることもありま



2010年公演「青空」より

永山…しょっちゅうですよ。でも、「わかんないけどなんか面白かった」とか「わかんないけど涙が出た」とか「わかんないけど笑っちゃった」とか、わからないの後に『けど』と言わせたんですね。作品を見るときには「わからない」って大事だと思います。作品を観て「わかった」ということほど、怖いことはないと思う。それは自分の枠の中だけで収めてしまうことです。無意識に潜り込んだなにかが、ある日突然わかる瞬間があるとすれば、それはその作品の命がそこまで続いていったということでしょう。「わかった！」となる瞬間にその作品の余地はその人の中で失われてしまうんじゃないかと思っています。

「身体的な体験によって蓄積される知識」

山出…今まで見たことのないものや自分の物差しでは測れないことに対して、なぜだかわからないけれど感動したり、そういう体験ってありますよね。

永山…作品を見ることがや味わうことって、一種の旅みたいなことだと思います。旅の予定を立てて、下調べもきちんとして、行程通り予定をこなしていくような旅では面白くないと思うんですよ。「うわあ、スゲー！」て言うのが旅の醍醐味じゃないですか。

山出：ガイドブックでエッフェル塔を調べて、現地に行って写真を撮って「ハイ次行きましょー」みたいな旅の仕方が多いじゃないですか。でも、それでは心は動かない。どうして自身自身の知識の中でしか、ものを見ようとしなくなってしまうんでしょうね。

永山：体験はなかなかできないけれど、知識はすぐに手に入りますからね。知識の範疇で体験することを抑えてしまうんでしょうね。「あ、エッフェル塔だ！知ってる」という、確認作業になってしまう。

山出：僕らが意識しなくとも、テレビやラジオから情報が自然に入ってきて、世界で起きていることが一瞬のうちにわかってしまう。そんな中で、感動する心を持ち続けるにはどうしたらいいんでしょうか？

永山：原点は自然です。自然って本当にわからないし、私達の手ではどうすることもできない、圧倒的な力を持っている。夜になれば暗くなるし、朝になれば明るくなる。雨も降るし、寒くなったり暑くなったりもする。そういう自然を人間が文明というものを使って越えようとしていて、夜も明るいし、雨が降っても濡れなくなった。自然の中の体験をなんらかの形で取り戻していかないと、本当に厳しいと思います。体験をせずに共感や共有をすることは非常に難しい。身体感覚に

根ざした言葉を作ることが、私達の努力すべき点ではあるんですけどね。

「自分の物語に気づいてほしい」

山出：仮に大きな災害が起きたとして、もっと強く安全にと、コンクリートで固めていくような、自然に抗い、全てをコントロールする社会になっているのではないか。方丈記のように、自然の流れを移りゆくままに受けとめていくしなやかな感性が社会に必要なのでは、と感じます。

永山：今日は宮崎の山の中の小・中学校合間でワークショップを行いました。全校合わせでも20人しかいなくて、周りは山ばかり。夜になると真っ暗だから、そこ暮らす子ども達は、闇の暗さを知っている。

闇という言葉はいけないことのような語法になっていくけれど、闇は厳然としてある。一個人との付き合い方を考えるときに、闇を知っていることってすごく大きなことだと思っています。そういう意味では、九州にいる我々にはまだまだ希望があるんじゃないのかな。全てコントロールしようとしないうちで暮らしている若い人達には希望があると思っています。

山出：大分に日本で一番古いと言われている

田園風景があるんですが、夜に訪れてみたらものすごく星が綺麗だったんですよ。東京の子がそういう風景を見たら感動すると思います。今は闇を見せなくなっていて、いろんなものを人工的にコントロールしている。そういう風景が残っていくことはすごく重要ですよ。

永山：物語がどこから生まれるかという話だと思います。僕は物語を作る立場なので、国が地方創生で描くような物語はチープに感じます。星の美しさがそこにあるというような物語を作っていかなければならないと思うんです。そこに何千万人が来て、お金をたくさん落とすとして経済効果がいくらみたいなことよりも、一人の人間にとって、そこで星を見て、今まで味わったことのない体験が自分の中に落ちていくということは、それだけで十分な価値があると思うんですよ。その物語を作っていかなければいけないと思っています。

これは自分達のいる場所で、自分の暮らしがより楽しくなるという感覚で作っていくしかない。その物語を作るお手伝いはできるのかもしれないけれど、でも基本的には一人ひとりが作るしかない。そういう中に本当の豊かさや自分の物語があるということに気づいてほしい。「地方創生」みたいな安易な物語で何が起こせるんだらうって思いますよ。

山出：同じ経験をしていても、それは一人ひとりで別の経験ですよ。これを今の社会は画一化しようとする。価値を押し付けられているような気がします。

永山：同調圧力が強くて、自分の人生の物語に対して価値を見出すことが難しくなっている。自分の物語って立ち止まらなないとわからないんですよ。立ち止まって、振り返ったときに見える。そのときにはじめて明日からの自分の物語に生きていける。明日の自分の物語のエピソードなんて誰にもわからない。わからないけれどやっぱり生きています。ですからこそ立ち止まって、自分の物語を振り返る時間が大事なんです。そのきっかけになるのがアートの持つ力だと思います。

Unlimited

障がいのあるアーティストの活動支援

London, United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland

「英国において障がいのあるアーティストの活動が広がった背景」

英国における障がいを持つアーティストの活動は、人権運動の一部として始まったといえます。最初は私的な作品や控えめな作品を発表するだけでしたが、1980年代から表現のメインストリームに出ていき、「私達も語るストーリーがある」と訴え始めました。例えば、「障がい者が舞台に立てるはずがない」という社会の反応に抗うように障がいを持つパフォーマンス、ナヴィル・シャバンは自身が舞台に立つために、グレイアイ・シアター・カンパニーを設立しました。

また1984年にはリバプールを拠点に障がいのあるアーティストが参加するアートフェスティバルとして Data Feet がスタートし、以降数十年開催されています。2008年に助成金を獲得したことにより規模を拡大し、国際的プログラムとして大成功をおさめました。こうした背景をもとに、2012年のロンドン・オリンピック・パラリンピック競技大会の文化プログラムの一環で展開された「アンリミテッド」がさらに起爆剤となり、英国において障がいのあるアーティストによる優れた芸術活動に対する認知度はさらに向上し、人々の理解も高まってきました。

「ロンドン2012とアンリミテッド」

英国では2012年ロンドン・オリンピック・パラリンピック競技大会の文化プログラムの一環として、障がいのあるアーティストの創造性溢れる活動を支援する「アンリミテッド (Unlimited)」が展開されました。2009年に、ブリティッシュ・カウンシル、アーツ・カウンシル・イングランド、クリエイティブ・スコットランド、アーツ・カウンシル・オブ・ウェールズ、アーツ・カウンシル・オブ・ノーザン・アイルランドのパートナーシップによりスタートした「アンリミテッド」は、左記の4つの分野を横断する包括的な支援を行うことを目指し展開されたプログラムです。

- 1 障がいのあるアーティストによる作品制作のための資金助成と制作委託
- 2 制作のうえで必要となる専門技能の育成
- 3 制作された作品の上演や展示
- 4 アーティストの国際進出ならびに国際コラボレーションの促進

2010年〜11年にかけて3度の公募を経て、障がいのあるアーティストや彼らが所属する芸術団体に29の新しい作品制作が委託されました。

アンリミテッド・プログラムのシニアプロデューサー、ジョー・ヴェレントによると、作品の選定基準として「障がいのあるアーティストが主導する作品であること」と「作品の質が高いこと」に焦点が当てられました。選ばれた作品は、ロンドン五輪の文化プログラムのクライマックス「ロンドン2012フェスティバル」で披露され、パラリンピックに合わせて開催された10日間の「アンリミテッド・フェスティバル」のプログラムの中核を成しました。アンリミテッドによって、これまでになく規模で障がいのあるアーティストによる斬新かつ意欲的な作品の数々が英国国内外で紹介され、プログラムは障がいのあるアーティストによる優れた芸術活動に対する認知度の向上と、アーティストの活躍の場の拡大に大きく貢献しました。その成功を受け、2012年以降も「アンリミテッド」のプログラムは継続し、ブリティッシュ・カウンシルの広範なネットワークのもと、英国のみならず世界各地で障がいのあるアーティストを支援する活動が広がっています。

「英国において障がいのあるアーティストの活動が広がった背景」

映像: An Introduction to Deaf and disabled arts in the UK
 (制作: Nicky Smith, e-n-n-n) / Carry Robson (Fittings Multimedia Arts), Tony Heaton (Shape Arts) and Jerry Searley (Grassie Theatre Company)
 のインタビューより抜粋・編集
 「ロンドン2012とアンリミテッド」
 ブリティッシュ・カウンシル WEBサイトより抜粋・編集



'Sue in the Blue' Artist : Sue Austin ©www.wearefreewheeling.org.uk Photographer : Norman Lomax

「車椅子で海中散歩」

2012年6月講演会(TEDxWomen)より

Sue Austin | スー・オースティン

(身体障がいを持つパフォーミングアーティスト)

私が車椅子を使い始めたのは今から16年前、病の進行によって外界との繋がりが変わってしまったときです。車椅子を使い始めたことで圧倒的な自由を得ました。それまでの生活が消え去り制限されてしまった中、車椅子はまさに新しい特別なおもちゃになりました。ブンブン走り回って再び風を感じ、ただ屋外にいるだけで爽快でした。

私が新たな喜びと自由を手にした一方で、周囲の人々の反応は完全に変わってしまいました。人々は車椅子の生活がどんなものか勝手な想像を巡らせているようでした。「車椅子」と聞いて何を連想するか聞いたところ、返ってきたのは「限界」「不安」「衰れ」そして「制限」といった言葉でした。そうした人々の反応は私自身の内面に定着し自分が誰なのか、根本のレベルで変えてしまいました。私は自分という存在を、自らの視点ではなく他人の反応を通じて絶えずそして鮮明に見続けたのです。そこで私は自身の経験を自ら語り、アイデンティティーを取り戻す必要があります。

私は創作活動を始めました。車椅子を使う

楽しさや自由な感覚を伝えることで世の中と向き合いたいと思いました。私の内面に定着しアイデンティティーを形成してきた先入観を変えるために、これまでの概念を超えたイメージを作ろうとしたのです。車椅子は色を塗って遊ぶためのオブジェとなりました。文字通り喜びや自由の軌跡を残し始めると、人々が興味や驚きを示しました。また私もそれに刺激を受けました。まるで新たな視野が開かれパラダイムシフトが起きたかのようでした。芸術の具現化によって、自己のアイデンティティーを再構築し既成概念を見直すことで、先入観を変えることを示したのです。

そして2005年にスキューバダイビングを始めると車椅子と同様にダイビングの道具によって行動範囲を広げられることがわかったんです。ダイビングの道具から連想されるのは「刺激」や「冒険」であり、人々が車椅子に対して抱くイメージとは全く異なります。そこで思っただけです。「もしこの二つを一緒にしたら、どうなるかしら？」そしてその結果誕生した水中車椅子がそれまでの7年間のうちで最も素晴らしい旅に私を連れ出しました。これまでの人生で遭遇したどんなことよりも素晴らしい経験です。文字通り360度自由自在に動くことでこの上ない喜びと自由

を味わいました。

そして更に意外なことに周囲の人々も同様に感じているようなのです。彼らは目を輝かせて「私も同じものがほしい」とか「あなたにできるなら私にも不可能はない」なんて言うんです。恐らくそれまでの既成概念を超えた光景を目の当たりにした瞬間、人は全く新たな視点から物事を捉えないといけないからでしょう。更にそうした新たな気づきと共に発想の自由が生まれ、他人の人生にも及んでいくのではないのでしょうか。人は他人とは違うからこそ見出せる価値があり、「喪失」や「限界」ではなくそれがもたらす「喜び」に着目することで刺激的で新しい視点から世界を見るパワーと喜びを発見するのではないのでしょうか。私にとって車椅子は変化のための手段となります。実際私は水中車椅子を「ポータル(入口)」と呼んでいます。なぜならそれはまさに私を新たな自分へ、次元へ、そして新しい意識レベルに導いてくれるからです。また、これまで誰も水中車椅子を知らなかったのですが、このような光景を作り上げることは、新たな視点・存在・知識を創造することを意味します。今日ここでそうした概念を持たれた皆さんもこの創作活動にすでに参加しているのです。

© Sue Austin, TEDx Women 2012



アートはジャンルのひとつではなく、様々なものを組み替えるメタ技術である。

(インタビューでの発言から抜粋)

現在、障がい者アートの普及および課題の解決に取り組む個人・団体が様々な活動を全国で展開しています。時にそれらの活動は、社会の在り方について考えさせ、我々に気づきをもたらします。本事業「Action!」は、障がい者アートの展示・鑑賞を目的とする展覧会ではなく、活動に従事する方々の言葉を中心に紹介し、課題やビジョンを共有する場、考え、活動が生まれる場づくりです。今後、ここ大分県でも、社会を豊かにするための活動=Action が生まれてくることを目指し、本事業を開催します。

障がい者アートに関わる国内外の個人・団体の活動を紹介



アートリンク・プロジェクト

アーティストと障がい者の出会いと対話から新たな関係性や作品が生まれる。



Unlimited

ロンドン五輪の文化プログラム「Unlimited」で発表された映像作品を上映。



音遊びの会

即興音楽文化と知的障がい者の出会いが音楽の新しい概念を生んだ。



Good Job! プロジェクト

アート、ビジネス、福祉の分野を超えて新たな仕事を生み出す取り組み。



たんぼぼの家

障がい者アートの草分け的存在「たんぼぼの家」の約40年の変遷を年表形式で展示。



みやざき◎まあるい劇場

身体障がい者と共に演劇活動を行う中で多様な人々が関わりあう在り方の模索。



やまなみ工房

いかに個の輝きを放てるかという思いの末に生まれた工夫・環境とは。



陶器・ガラス工房 ラバロマ

障がい者に家族として向き合い、社会で能力を発揮する過程を紹介。

EVENT | 全て無料

SHOP | 個性豊かなセレクトグッズを展示会場内にて販売!

WORK SHOP

16± 14:00-16:00

講師：中野マーク周作 (陶器・ガラス工房ラバロマ)

「小麦粉ねんどでオリジナルの怪獣をつくらう!」作
※小学校3年生以下は保護者同伴
定員：20名

予約優先

FORUM

16± 17:00-19:00

1部 / 講師：播磨靖夫 (たんぼぼの家)

参加者全員で障がい者アートについて考えるためにフォーラムを開催。たんぼぼの家の多岐にわたる活動から障がい者アートについて考える。

2部 / 進行：山出淳也 (BEPPU PROJECT)

参加者全員で社会的包摂の観点から障がいについて考える。

定員：150名 (1部、2部合わせて)

予約優先

MOVIE

17日 13:00-15:00

上映 (協力：音遊びの会)

「音の城」音の海 -SOUND to MUSIC-」

公演に至るまでに重ねられたセッションと対話を丁寧に綴ったドキュメンタリー映画。

定員：100名

先着順

ショップ HUMORA

HUMORA (ユーモラ) は障がいのある人が関わる商品を集めた期間限定ショップです。かわいいだけじゃない、ストーリーのあるアイテムが全国から集まります。



商品イメージ

そのほか

それぞれの活動に関連する書籍やDVD、グッズを販売いたします。価格と合わせてお楽しみください。



ご予約・お問合せ先

大分県障害福祉課ホームページのAction! 予約受付からお申し込みください。

担当：大分県福祉保健部 障害福祉課 緒方
受付時間 9:00-17:00 [休：土日祝、12月29日-1月3日]

TEL 097-506-2725
FAX 097-506-1740